質疑応答

○小宮山道夫　大変お待たせいたしました。それではこれより、本日の基調講演、特別講演二本を含めまして、質疑応答の時間を設けさせていただきたいと思います。まず、一つ一つの講演についてということをする時間がありませんので、どの方についてでもかまいません。もし質問があれば、まずフロアーのほうから拾いたいと思います。質問の際にはマイクが回りますので、ぜひお名前と、ご所属がありましたらご所属を仰ってから、お話しいただきたいと思います。

それではないようですので、私の方から多少、話題提供といったものをさせていただこうと思います。

お三方の講演のなかにもそれぞれ含まれておりましたが、文書館の組織を考える際に、図書館や博物館といった他の組織との関係をどうとらえるかという課題があると思います。例えば大濱先生の講演ですと、それらの情報を提供する組織を総括して、その中心にアーカイブズがあるべきだというようなお話がありました。しかし、各大学、とくに地方の大学などについて考えますと、それぞれを一つずつつくるというのは、なかなか難しい状況に置かれている実態があると思います。そうすると、親組織のあり方によっては、新設のアーカイブズ的組織に要求される仕事の内容は異なってくると思うのです。そうした場合、アーカイブズはどういうスタンスであるべきかというようなことを、お話いただければと思います。

まず、大濱先生にお願いできますでしょうか。

○大濱徹也　まず、大学の問題点。こういう問題は、自治体にアーカイブズをつくるときに常に起こってくる問題です。当初、早い時期にできたアーカイブズでの問題は、郷土史料というのはすでに早くより、図書館がかなり集めていた。すると、アーカイブズができるから、図書館が集めたものをこっちによこせというようなトラブルが、いくつかのところで起きました。

そうではなくて、私がかかわった板橋区の場合は、郷土資料館というのがあって、そこが江戸時代の近世文書の調査をはじめ、民俗関係の聴き取りをずっと長年やっているわけです。ですから、そういうものは、そこがきちんと体系的に収集すればいい。板橋区公文書館をつくるのであれば、明治以降のものは、私たちが東京都や何かで集めた

マイクロしかないわけですから、新しく板橋区になってからのものを体系的組織的に管理運用することを公文書館の職務にしなさいと提案しました。しかし、文書館等では、なかにいる人が近世史や何かを勉強していると、そちらのほうが懐かしいものですから、やはり近世文書にのみ目がいきがちになる。そうすると行政のなかで言うと、結局、行政の諸記録に関心を示すことなく、何もやらないじゃないかという話が出てくる。しかも、そういうところで一番難しいのは、議会関係と教育委員会関係というのを、首長部局が全部集めていいかという議論。ですからそれら組織の記録も、公文書館に持って来れるものは持ってくる。さらにそのときに、かつて区長や区議会議長をやった人たちの個人的なものがあるならば、それは個人文書というかたちではなくて、区長、議長という公人なのだから、それも併せてもらえるものを集めなさいと言ってきました。

ただ非常に難しいのは、そこにいる人間というのは、ある意味では気の毒な状況なのです。多くの専門職がパーマネントじゃなくて、みんな嘱託契約というかたちです。そこに来る行政の人が三年ごとに移るから、それとの人間関係と、その人の力関係みたいなものによって、なかなかアーカイブズができてもうまくいかないのが現実です。その点で言えば、図書館の司書たちのほうが、よほどある点では知ってるけれども、図書館の人たちはアーカイブズができると、うちはもう図書だけでいいということになって、うまくいかない。ですから、やはり図書館なり、歴史館的なものにいる人と、公文書館、文書館にいる人たちとを、どういうかたちでチームを組ませるかということを、よく考えていかないとできないのです。大学の場合でも、大学図書館がかなり集めているところもあります。かつて集めたものであれば、系統的に尊重してあげるなかで、なかにおいて区分けをどうするかというのを、きちんと詰めていったほうがいい。それをしないまま、例えば小池さんのように、あちこちへ出ていく指導者がいて、これもうち、これもうちとやると、小池さんのときのエネルギーでは持つかもわからないけれども、次の人になったときに、逆に干されてくるのではないかとの懸念もあります。杞憂に終わればいいのですが。

ですから、いま一番必要なのは、ここで言えば大学図書館があるし、この大学の大学博物館はわかりませんが、文書館があるので、その関係をどう関連づけていくかというのを、できた当初のうちに早くつめておくほうがいいのではないかと。さらに世界的な潮流で見ると、アーカイブズは情報資源という発想のなかで、カナダなどでは、ライブラリー・アンド・アーカイブズというかたちで国立図書館と国立公文書館とを一緒にしています。そういう傾向がだんだん出てきている。アーカイブズというのは紙だけではなくて、テープからビデオまで含めた記録というかたちが出てきていますから、なおさら大学アーカイブズというのは、図書館との関係をつけていきながら、それぞれの組織のあり方という意味で、どういうふうに守備範囲を決めるか。そのなかでただ唯一、かなりやらなければいけないのは、大学行政などの記録というのは、組織の記録として主体的にアーカイブズが管理していかねばなりません。レコードマネジメントの目が今後ますます問われてくるのではないでしょうか。

○小宮山　ありがとうございます。

○小池聖一　文書館の小池です。いまのお話、広島大学のときどうだったのかというお話を少しさせていただきたいと思います。

広島大学の場合は、文書館をつくるにあたりまして設立準備委員会をつくりました。設立準備委員会には、図書館の方もたくさん入っていただきまして、特にそのときの図書館の部長をされていた由良さんという方は、図書館の図書システムで非常に有名な方で、いまは金沢大学に移られましたけれども、京都大学の文書館をつくられたときにも参画されていた。そういう意味では、文書館の位置づけについて非常にご理解のある方でした。

彼との間で、私どもがどういうふうに文書館と図書館で場分けをしたのかと言いますと、図書館というのは、やはり一般の人たちに資料を公開する、すべてを公開する組織だと。しかし、いわゆる文書館の場合には、個人情報だとか、どうしても公開できないものも入っている。そういうものも合わせて、一体として持つのが文書館ではないかというお話をいたしました。ところが実際には、現在は図書館にも近世文書を中心にいろいろな史料がございます。そのなかには、広島大学の元の旧文理科大学の先生が集められた史料もあるし、文理科大学の先生の個人史料もある。そういうこともあって私どもとしては、図書館の下に我々が入って仕事をするというわけにはいきませんが、教員システムを使って、その教員で研究会をつくって、お手伝いをして、一緒に整備をしませんかというお話はしているのです。ですから関係性の面でいきますと、そういう点でなんとか関係性をつけていこうと。

ただ私としては、当然、文書館がすべてを手に入れるというわけにはいかないですから、近世文書、あるいは地方文書のものは整理をして、図書館にセクションがありますので、そこに入れていくのが一番いいのではないかと思っております。そういうところで棲み分けをしながら、しかし一方で、整理という点では協力をしあいながらというふうに考えています。ただ、どうしても重なる部分というのは出てきますので、そこは、いまお話を重ねているところではあります。

正直に言いまして、図書館も文書館も「情報公開法」の世界で言いますと、「情報公開法」第二条第二号機関というかたちで、共に文書を持ってもいいのです。ただ、文書の公開をする公開機関として考えますと、文書の収受という点では文書館が。また、私ども文書館が、なぜ旧事務組織に相当する人事総務部の下についたのかというのも、公文書や行政文書を円滑に活かしていただき、整理をし、それがいわゆる事務、および大学行政の合理化につながると考えた上で、人事総務室についたわけです。いまの図書館は、学術部というところについておりまして、その違いをオーバーラップさせながら、ある意味で協力しあいながら棲み分けていくことを、現在、努力しているところです。

○小宮山　ありがとうございます。

○**伊藤隆**　先ほどお話ししましたが、私がいまやっている史料収集作業というのは、私個人の作業みたいなかたちと、大学のなかというかたちと、非常にあいまいにやってきたものですから、足元をすくわれてしまったのですが、結局、大学への集積はたぶんできないだろうと私は思っています。

『東京大学百年史』のときに一番困ったのが、その史料室をつくったときに定員が配置されておらず、とりあえず、教育学部の助手一名をそこに張りつけるというかたちでスタートしました。そしてあとで、そこに助手一名を配置することになっていたのですが、突然その方が亡くなられて、そこから先はどうなったのか、私もちょっとわからないのですが。そこでは、助手になられた方（中野実氏）が非常に熱心におやりになって築き上げたのですが、その方が亡くなるということになりますと、それまで蓄積したものが、突然、絶えるわけですから、非常に困っただろうと思います。

同じようなことですが、国会図書館の憲政資料室。これは日本で最大の個人史料の集積なのですが、図書館のなかにあります。図書館のなかにありますと、どういうことが起こるかというと、二年や一年で異動があります。文書（もんじょ）というか文書（ぶんしょ）なるものに、ようやく少し慣れたかなと思うころに異動でありまして、仮に戻ってくるとしても七、八年先になります。ですから、なかなか専門家が育たない。なぜそうなるかというと、これはその個人の昇進のためでもありますし、館のなかの人事政策によるのです。館としての人事政策の中で、その特殊な憲政資料室である政治資料課は、特別にどうこうするということは絶対にできない。これは組合の問題も入っているわけです。ですから、専門家は絶対に育たないという組織になっています。それでもがんばって、三年ぐらいいて、しばらくよそへ行って、また戻ってきて三年ぐらいいるという方がおられますので、いまはその人に頼りきりになっている。その人が本当にどこかへ行ったきりになったら、もうどうにもならないという、そういう仕掛けです。ですから、組織ができたからといって、ものごとがうまくいくような話でもありません。

もう一つ、私はいま、秋田市史というものに関係しております。秋田市史は、出発当初に編纂委員会を開きまして、近代の場合は、市役所が現に持っている史料を十分に活用しなければつくることができないと、強硬に主張しました。各部局が持っている史料、文書課が一番たくさん持っているわけですが、その地下にある倉庫には膨大な史料がある。それを自由に使わせてほしいと申し入れたわけですが、これに対しては若干抵抗がありました。しかし押し通しまして、ついに見ることができるようになりました。でも、これだけがんばったにもかかわらず、現地の執筆委員の人はほとんど見にいかないという、非常に皮肉なことになりました。実は秋田市は、全国の市のレベルの文書としては、一位、二位を争うぐらい豊富な史料を持っているわけですが、じきに編纂が終わると、また締めてしまいますから、それはまずいので、文書館にしてくれと強く要求しているところです。これもやはり、教育委員会や各部局の足並みが揃いませんで、遅々として進まずという状態になりまして、時間切れで終わりになるのではないかと

心配をしています。ただ、執筆委員の一人に文章を書いてもらいまして、秋田市は日本一の文書の保有を誇るところであるという文章を『秋田市史研究』に掲載させてもらったので、いまさら引っ込みがつかないというところもあるかも知れぬと思っています。あるときに、秋田は佐竹が殿さまですから、佐竹が秋田に入部して四百年記念のイベントをやることになりました。すると、私に対してその委員長の方が、「昔、三五〇年という記念をやったにもかかわらず、なんの史料もないんだよ」と言う。「事務局に聞きに行ったら、ないと言った」と言うのです。でも、私が前に地下倉庫を見たときには、あったような気がする。それで調べてみましたら、ありました。「ありますよ」ということで、だからやはり、これはきちんと整理をして、検索できるようにしなければいけませんよと言いましたら、その方は史料館をつくらなければいけないということを認識してくださって、応援してくださっているという状況です。

でも、これは多くのところがそうですが、実際にやる側である文書館長などには、だいたい実権のない、例えば教育委員会系統ですと、校長先生を終わった方が館長に座るようになっている。これは要するに嘱託で、非常勤であり、そこから予算を請求していくという仕掛けではないのです。余生を送る場所になってしまっている。結局、嘱託の人で使命感がある人がいると少しずつ動く、いないと、まったく寝ているという組織になってしまいます。これは個々に問題がありまして、それぞれに対応しなければ、なんともしがたいという絶望的な状況でございます。

○小宮山　ありがとうございました。フロアーのほうからご意見があるようですので、よろしくお願いします。

○木田宏　私は、こんにちの歴史教育がどういうことになっているのか、戦後のことはわからないのですが、日本で歴史の教え方がちょっと違っていたのではないかと思えてしようがないのです。それは、私自身のことを考えますと、歴史という授業は暗記科目であって、試験というと人の名前と年代を書かされるという、いやな共感を得たように思っておりました。ところが、世の中に出ていろいろと仕事をしていきますと、「歴史に学べ」という言葉が、本当は全部に生きてくるのです。しかし私には、歴史に学べという感覚がない。歴史は人の名前の記憶でいやだと、私自身のことを言えばそういう感じですから。

大濱さんが先ほどのお話のなかで、文書館というのは、大学のなかで何をやったらいいのかという問題で、単なる過去の記録だけとか、好きな人が、あるいは好事家が行ってみるところという意識でしかないのではないか。それに対して大濱先生は、「そうじゃない。大学をどうするかという問題意識を持って過去を見る」とおっしゃった。これは非常に大事なのです。日本のいろんな役所の仕事にしても、政治をするにしても、本当は過去に学んで、そこから何をこんにち考えなければいけないかということなのに、我々の記憶で教わった歴史は明治のはじめで止まっており、それでは、一番肝心なときに、学んでそれをいまに生かしていく方法につながらない。

これだけの材料をどう使うかという方法論が歴史なのだということ

を、もう少し幅広くうったえて、教えてくださるといいのではないかと思いますが、ちょっとこんにちのことを知りませんで、あいすみません。

○小宮山　木田先生、ありがとうございました。いまのご発言に対して、何かおっしゃることがあれば、よろしくお願いします。

○大濱　まったくおっしゃるとおりです。よく戦前の皇国史観はよろしくないと言うけれども、戦前の皇国史観を批判している本を読んで、そこの「臣民」を「人民」に置き換え、「人民」を「臣民」に置き換えると、同じように通じる。つまり戦後の人民史観も同じ構造で、ある観念を教え込もうとする刷り込み型の教育ということでは同根なのです。それだからこそ、歴史教育が今の体たらくになったのだと思います。

私は、アーカイブズが実際問題として、現在は好事家的な場になっているところに、社会的認知を受けられない問題があるのです。いま木田先生もご承知のように、アジア歴史資料センターができて、外務省外交史料館、防衛庁防衛研究所図書館、うちの国立公文書館のデータをデジタルで入れているわけです。それを実際に使ってくださった先生の報告があります。例えば「ハル・ノート」が全文読める。あるいはそのときの暗号電文がある。生徒たちには、その「ハル・ノート」のある部分や、電文の隠語のところをあてはめて、その時代のことについてそれぞれの報告書をつくれと。例えば、花子さんとは何というふうに全部あるわけです。高校生たちは、非常におもしろがってやる。やることによって、あの状況下における日米間のやりとりが、少しは自分のものとして見えてくる。そういうかたちで授業をすれば、まさに手ざわり感のある歴史の読み方ができるわけです。いま、私は勤務先が北海道で、北海道の遠隔地教育、僻地教育の関係者と話していることは、村には老人たちが多いのだから、生涯学習と、中学校・小学校の遠隔地教育を一体にするなかで、アジ歴が提供しているデータを村の老人と生徒が一緒になって見る。小学生なら見るだけでいいのです。例えば、総理大臣の花押が時代とともにどんな字にみえるかを見ただけで、歴史はおもしろくなる。そういうかたちで、歴史はもっと身近で、私にとって歴史とは何、自らの問いが出てくると、少し変わるだろうという思いがあります。

また、最近の中学校の教科書では、メールアドレスを関係資料のところに入れるようにしています。例えば、国立公文書館にある西郷隆盛の辞表を載せると、その下に国立公文書館のメールアドレス。中学生だったら、そこにアクセスするのです。そしてアクセスすると、ほかにこんなものがあるとわかることによって、この史料はこれだよと教えるのではなく、その史料にかかわるもので、こんな発見があった。足利学校にアクセスすると、もっとこんなのもあったと世界が広がる。そういうことが、いま、やりようによっては可能になってきている。歴史は知的ゲームだと思うのですが、時代の記録を自分の目で確かめ発見していくことで、自分の目で歴史を読みとることが身につくのではないでしょうか。その可能性が、私は大学アーカイブズにもあるの

だと思います。例えば、大学史の講義などで一つの見方で大学の歴史を教えるけれども、もう一つ、学生がアーカイブズでこのときのこういう記録をどう読むかということで、大学像が変わってくる。そういう可能性に期待をしたいと思っています。ついでにもう一つ別のことですが、先ほどから伊藤さんが言われてたことでいうと、日本の場合、国立公文書館には最後の決裁文書のうわっぺらしか来ないことになりかねない。ですからそういう点で言うと、この大学アーカイブズも似たような現象が起こるだろうということで、起案から結論に至るまでのものを、どうやって集めるか、アーカイブズが記録作成段階から記録管理にどこまで踏みこめるかどうかが問われています。

それから、個人文書をどうするかという点で言うと、いま「佐藤栄作日記」が国立公文書館に寄託されておりますが、今後は、内閣総理大臣のものに関しては、国立公文書館に入れることにしていくとか。それと合わせて、自治体の県なら県、府なら府で、個人文書を入れるような体制をつくっていければいい。ただし、つくっていければいいのですが、一番の問題は先ほど言った人の問題で、実際そこにいるアーキビスト、専門職の人というのは、嘱託か、せいぜい一人か二人いればいいのが現状です。それぐらい、日本は記録に対する感覚が乏しい。それが乏しいのはなぜかというと、歴史はあるものを覚えればいいから、覚えたら、もう資料はいらないという状況になってくる。だから非常に先の長い話なのです。

アーカイブズを地に根づかせるためにも専門職アーキビストの養成と処遇を高めることが求められていますが、多くの壁があります。それだけにアーカイブズの社会的認知をめざすことが当面の課題です。アーカイブズを通して歴史を読む目も変わってくるのではないでしょうか。

○小宮山　ありがとうございました。どうぞ。

○檜山洋子　大変おもしろいお話を非常に興味深くうかがったのですけれども、普通の庶民にとりましては、雲の上のことというような気もいたしました。それと同時に、地方でもこういうなりゆきというのは、これから続いていくものだと思うのですが、文書館であるとか、記録、これが一般市民やにとってもとても大切なのだよ、地域に住んでいる者にとっては非常に大事なものだよ、という啓発。これが、まず第一に必要だと思うのです。

何か行政の人やお好きな方が、好きなようにやっているという感覚ではなくて、私どもが生きていく上で、地域の未来を見据えるために、このことは大事なのだよと啓発していただいて、これが私ども市民の大きな力になれば、きっと行政の方の地位が悪くても、大きな力になって揺り動かすことができるのではないかと思うのですけれども。

いま、あまりにもかけ離れて、大学は違うのかもしれませんけれども、行政に関してなどは、あまりにも感覚的にかけ離れてしまっていると、雲の上のことになっているということも知っていただきたいと思います。

○小宮山　ありがとうございました。

○小池　ありがとうございます。私ども大学文書館という立場から言いますと、広島大学はもともと広島市の東千田町にありまして、それが統合移転をして、東広島のこの地に根を張ったわけです。ただ、まだOBの方々は東千田が懐かしいですし、あそこはいいところですから。また西条の我々にとっては、西条もいいところです。だんだんと住みやすくなってきて、最初はぬかるみばかりだったのが舗装されましたし、食べもの屋も飲み屋もたくさんできてきました。あまり私どもが行くと、学生がアルバイトをしているので、つらいですけれども。そういう点では、非常にいろんな意味でよくなっています。そういうところで、大学というものが根付いていく、公開をしていくということで、いまおっしゃっていただいたように、根を張っていく上でいろんなものを消化していく作業を、本当にしていかないといけないなとは思っております。ただ、今日はこれだけいい講師を集めたのに、シンポジウムの参加者が非常に少なかったなと、とても申しわけないと思っております。まだまだ、私どもの努力不足というか、広報能力の低さが非常にあると思います。今後そういうところも改善しながら、私どものほうからも、出張授業などいろいろなかたちで、どんどん企画していきたいと思います。そういうことをとおして、いろいろな方に参画してもらおうと考えております。

特に今回は総合科学部の三〇周年で、同窓会の出張展示をしました。多くの方に喜んでもらえて非常にうれしかったです。私は広島大学で教員をやっておりますけれども、授業で教えても、直接的に感謝されたことがない。「先生の授業で人生が変わりました」という子どもはいますけれども、それは悪くなっている場合もあるので、いいとはかぎりません。その点で言いますと、この仕事は本当にいろいろな方々とお付き合いができて、直接的に喜んでいただく顔が見られるというのは、私としては非常に楽しい仕事であります。また、それをやっているために情報公開ということで、あまり地味だと言うといけないのですが、文書を一つ一つ記入していったり、目録をつくったりするのが非常に好きなのです。ですから我々、小宮山さんもそうですし、天職だと思っています。

いまインターネットで情報公開もしております。森戸辰男展に関しては、インターネットで入っていけるように、私はぜんぜんできませんので小宮山さんにやってもらったのですが、そういうところで、いろいろな情報公開をしていきますので、みなさまもご利用していただければと思っています。

○小宮山　ありがとうございます。どうぞ。

○伊藤　普通の市民ではあまり関係がないということでは、まったくないのではないかと私は思うのです。誰でも、自分が属する組織や仲間、そういうものがあります。自分が生きてきた一番小さい単位は家族です。そしていま、非常にはやっているのが自分史という分野です。自分が長年生きてきて、こんにちまで、いったい何を積み重ねてきたのか。あとに残せるものが何であるかということを、記録として残し

ていこうという運動があります。

私がやっているオーラルヒストリーというのは、私の専門が日本政治史なものですから、やはり政治、行政、外交、防衛といったところに中心があります。しかし私個人の関心として、出版社が乗ってくれたら、ぜひやってみたいと思っているのは、『日本凡人伝』というのを猪瀬直樹が書いておりますが、有権者名簿で百人おきとか二百人おきに、人を無作為に抽出して、その方を説得して、その方の生きてきたこんにちまでを記録する。つまり、この平成のある時期に生きていた人たちが、どういう生きざまをしてきたかを記録する。いまの日本を横に切るようなことなのですが、それはその人たちの経歴ですから、かなりさかのぼるわけです。そういうのを、ぜひやってみたいと思っていますが、これは私がやらなくても、みなさんのサークルなどでもできるのではないかと思います。自分の家族史を考えてみると、古い家計簿が、かなり多くのお宅に残っているのです。いまは家計簿も研究対象になったりしていますが、家計簿を見ますと、そのときにいったい何をしていたのかということが、だいたいわかります。まず年表をつくって、自分がいつ結婚して、いつ子どもが生まれて、この年はどこへ旅行へ行ったとか、このときに給料がこれぐらいあったんだというふうな、自分自身の過去というもの。それから今度は、自分の属していた集団として、いろいろなサークルもあるでしょうし、昔で言えば隣組もあります。隣組というのは記録があって、その記録を誰かが持っているのです。そういうものを、みんなで学習してみることも可能だと思います。

ですから歴史教育というのは、先ほど木田先生がおっしゃったように暗記物ではなく、大濱先生がおっしゃったような知的なチャレンジなのです。しかし、データがないとできない。そのデータをどうやって読もうかというのは、やはり多少指導者がいるとやりやすいということです。たぶん小池君たちがさっき話したのは、地域との接点というかたちで、そういう地域の史料を読む、そういうグループをつくってみたいというお話だったと思いますので、むしろ、いろいろな計画を持ち込んでいただいてやっていったらどうかなと、私は思います。

私はいまの大学で、「日本の政策史」というタイトルで、現実には「日本の近現代史」を一五回で話をしているのですけれども、私のところの学生は、だいたい三十代前半ぐらいの上級職の役人です。この方々にいろいろお話をして、やはり自分は日本の近代について知らなかったということがわかったという感想を言われて、講義をしてよかったのだと思っております。非常にきちんとしたレポートを出してくださって、これだけちゃんと本を読んでくれたな、私の言ったことをちゃんと理解しているな、というふうな感じでおります。

それは大学のレベルとか、一般社会でのレベルなど、部分やレベルによってやり方は違うと思うのですが、やはり知的なチャレンジは、ぜひおやりいただきたいと思います。

○小宮山　ありがとうございました。申しわけないのですが時間的制約がありますので、手短によろしくお願いします。申しわけありません。

○大牟田聡　今日は、小池先生のほうからご案内をいただきました、大牟田稔の息子でございます。

父が亡くなって三年間、実家のほうの史料は貴重なものがあるに違いないと思いながら、どうしていいかわからないところに、たまたま総合科学部の同窓会で小池館長とお話する機会があり、今回引き受けていただけるということになって、非常に喜んでいるのです。家族や遺族が価値があるだろうと思っていても、どうしたらいいかわからないというのが、ほとんどのケースだと思います。先ほどの伊藤先生のお話にもあったように、結局死蔵されてしまっている。となると、やはり文書館がどれだけ力を持って今後やっていくか、認知を高めていくかということで、その史料をいかに活用して、研究会なりといったかたちで市民に還元していくかということが、非常に貴重になってくるかと思います。

先ほどから歴史教育のお話がありましたけれども、祖父母ぐらいまでの顔が見える人たちの歴史は、非常に身近に感じられるのではないかと思います。ですから、そういう部分を糸口にして、戦後の復興というような研究が立ち上げられるようですけれども、そういったところへの一般市民の参加などをやっていくことによって、文書館はどんどん認知度が上がり、ますます史料を預けたいと思う人たちが出てくるというかたちで発展していけば非常にうれしいなと、私なんかは思っております。

それから伊藤先生が先ほど言われていたように、そういった個人史料がどこにあるかがわからないということも多くて、問題になっていくのだと思いますので、デジタル化のなかで、いかにその個人史料がどこにあるのか、どこに保存されて、管理されているかということも、今後大きな課題になるのかなと思いながらお聴きしていました。以上です。

○大濱　自分史とは何かというので、私は二部の授業を担当しており、看護師さんなどが多く、夏休みに「私の社会的経験が生まれたとき」という課題を出すと、必ず何か考えて、単に自分の感覚ではなく、どこかに行ってデータを取って、己の場を確かめようとする。そこではじめて、地元の郷土資料館や、墓地、忠魂碑など、そういう石碑を探してくる。ですから一つのやり方として、何かのきっかけを与えて考える場を用意する。そうすると、自分の家のおばあちゃんが残した家計簿を発見し、そこから時代を読み解く。日常的にあるものはくだらないものだと思いがちです。ですから、そういうかたちで一つのきっかけをつくっていく。

大学史をやっているときに、「大学における私の社会的経験は何か」と聞いてみると、おそらく大学史で話された問題が、自分の問題としてもういっぺん身体にささった刺となるのでは。要するに、歴史とか文書館の記録を読むというのは、自分の足元をもう一度確かめて見ていく作業だと思いますので、どうかそんな意味で長い目で見ていただければと。

歴史が学問のなかの学問などと言われるのは、長い目で見えるからだと、昔、徂徠が言っています。そんな点で期待をしております。

○小宮山　どうもありがとうございました。それでは大変申しわけありませんが、質疑応答の時間は、これにて終了させていただきたいと思います。みなさん、どうもありがとうございました。